

三春校アーカイブプロジェクト

活動報告



映像作品制作メンバー



阿部 冬佑真



菅野 みなみ



担任
加藤 久恵



総合担当
松枝 秀甫



制作メンバーからの「ここを見て」「ここを聞いて」のポイント

阿部 冬佑真

ぼくはインタビューしているときが一番緊張しました。相手の方にきちんと質問できるか心配でしたが、自分なりによくできたと思っています。印象に残っているところは、体育館を作るのに、他の学校の仮設の体育館を見て回り参考にして、工夫して作られたところです。

菅野 みなみ

わたしがよく見てほしいところは、三春校のいいところです。少人数でも学年関係なく仲良く遊んだり、助け合ったりしているところがいいところだとわたしは感じていたのですが、友達も先生もみんな同じように感じていたことに気がきました。

加藤 久恵

「福島県富岡町立富岡第一・第二小学校 三春校」が令和3年度末で閉所するにあたり、子どもたちの中に「学校のよさを多くの方に伝えたい！」「学校の歴史を未来に残したい！」という強い思いが生まれました。その思いを伝える方法として子どもたちが選んだのが、映像制作です。自分たちが何を伝えたいのか、どうすれば思いが伝わるのかを常に追求し、インタビューの仕方を工夫したり、子どもたちの目線で日常を撮影したりしました。貴重なインタビューを通して学んだことを胸に、学校に誇りをもって生活している子どもたちの、生き生きとした姿が伝われば幸いです。

松枝 秀甫

これまでの上級生の活動を引きつぎ、五年生の児童が「歴史を伝えていくこと」「思い出を形に残すこと」という2つのテーマで作品を作りました。子ども達は制作活動をしていく中で、学校の中のお気に入りの場所に色々なエピソードが詰まっていることに気づき、学校に係わる方達への思いも変化していきました。これまでの映像作品に児童や生徒達の日常や表情が加わり、三春校の様子がさらに伝わる作品になっています。

「何のため、誰のため」のアーカイブ？

富岡第一・第二小学校三春校で平成30年度にスタートした「三春校アーカイブプロジェクト」は、平成25年度から毎年小学5年生を中心に行われてきた「ラジオ番組制作・放送」の活動からの流れを汲んだ発信・記録活動の一環です。そしてこのアーカイブ活動は、令和3年度末で閉校となる三春校を、3つの側面からとらえ「記録」と「記憶」に残していくために始めました。



アーカイブで残す3つの側面

震災からの歩み

町の学校としての歴史

母校としての思い出



できごと、それぞれの体験
「記録」を残す



卒業生・在校生、
教員・関係者の思い
「記憶」を残す

これまでの作品は、震災から三春校誕生の経緯や児童生徒、保護者、教員関係者、学校設置の関係者の思いを中心にしたものがまとめられてきました。令和2年度、小学5年生の総合的な学習の時間での活動として実施された今回の大きな特徴は、「三春校の現在を記録・記憶する」ための作品となったという点です。三春校開校の経緯やその歴史、関係者の方々の思いを踏まえた上で、そのたくさんの思いが詰まった、「大好きな三春校」での思い出や学校の良さを表現した作品にするための活動が行われました。新型コロナウイルス感染拡大予防のため、インタビュー活動でもパーティションを使用したり、映像制作講師やパッケージ制作講師とのやりとりにもリモートを活用するなど、試行錯誤の映像制作となりましたが、震災から10年目となる年の小学5年生だからこその視点で制作されたアーカイブ作品となっています





活動内容 & スケジュール



この活動のポイント

- ・在校生が自分たちの手で後世に残したい「学校の記録」を制作する
- ・外部のプロ人材を講師として招き、記録制作のための方法や考え方などを学ぶ
- ・インタビューを通じて他者の思いを知り、自分の思いと織り交ぜた作品をつくる



活動スケジュール

令和2年4月～6月

- ・メディアの特長を学ぶ
- ・作品テーマ決定
- ・取材者選定、質問内容検討
- ・インタビュー練習



7～10月

- ・映像制作について学ぶ
- ・インタビュー収録・撮影



11月

- ・編集作業を学ぶ
- ・作品の構成を考える

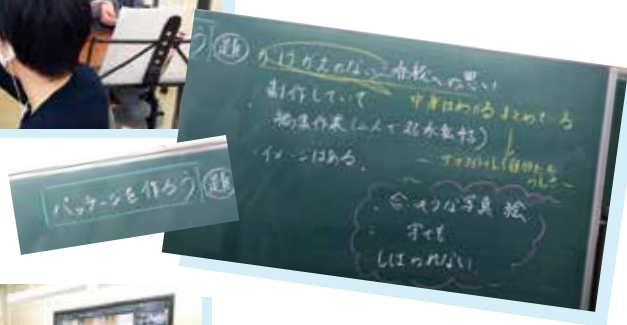
12月～1月

- ・全校児童生徒へのインタビュー取材
- ・ナレーション原稿検討
- ・制作児童、個別インタビュー撮影



令和3年2月

- ・ナレーション録音
- ・DVD パッケージデザイン授業



インタビューにお答え頂いた方々からの感想



富岡町教育長
岩崎 秀一 さん

ふうまくん、みなみさんが小学1年生で入学してきた時、私は校長として三春校にありました。その時は幼くて小さくて、自分の思っていることをなかなか話すことができない子どもでしたが、今回インタビューを受けた時に真剣に問いかけ、私の回答に頷いたり感想を言ってくれたりする姿を見て感動しました。「この三春校での出来事を本当に残したいんだ」という強い思いが伝わってきました。富岡町の人たちは、いつも三春校のみなさんを応援しています。そのおかげで三春校が誕生し、楽しい学校生活を送ることができたということを、一生忘れないで思っておいてほしいなと思っています。そして、将来大人になった時、今度は自分たちで富岡町に対してできることを探して実行してくれたらうれしいです。



富岡町教育委員会所属
石井 弘和 さん

三春校の歴史について、一緒に学ばせて頂いてもらってありがとうございました。震災があり、三春校が出来、その三春校が担ってきた重要な役割を「伝えること」、「紡ぐこと」の大切さを改めて再確認・再認識できました。このことはみなさんにとっても、ふるさと「とみおか」へ繋がる大きな財産だと思います。皆さんの明るい未来にエールを送り続けます。



インタビューにお答え頂いた方々からの感想



スクールバス 運転手
有限会社 野本観光バス
野本 正雄 さん



スクールバス 添乗員
有限会社 野本観光バス
鈴木 光子 さん

幼稚園の頃から2人を見てきたので、インタビューされた時にはとても成長を感じ、うれしくなりました。三春校での思い出を記録する映像作品にスクールバスの思い出が入っていることもとてもうれしいです、ありがとうございました。



三春校教諭
大室 圭次郎 先生

自分たちが学んできた学校がどういう学校だったのかを知り、閉校を考え、その先にまで残る映像作品を作るというとても大変な活動をやり遂げたことは、ふうまくん、みなみさん自身にとってもすごいことですし、富岡町のアーカイブとしてもすごく大きな意味があると思います。長い教員生活を送ってきた中で、児童からインタビューをされるという経験はなかなかないものでしたが、二人からの質問に受け答えしたことで、私自身もこの学校の閉校が現実的に間近に迫ってきているんだなと感じさせられました。これから残りの時間、三春校のみなさんとの時間を大切に楽しみたいと思っています。



実施学校長より



繋ぐ～過去から現在、そして未来へ～

富岡町立富岡第一・第二小学校長
設楽 芳浩

令和3年度末、富岡第一小学校・富岡第二小学校は閉校となり、「富岡小学校」として一校に統合されます。令和4年度には、富岡町にある現在の「富岡校」校舎で『小中併設型小中連携校』として新しいスタートを切ります。それに伴い、ここ「三春校」は閉所となることが決まっています。

新しい統合校のスタートは、富岡町復興のシンボルに他なりません。子どもたちの笑顔や歓声が町に溢れることを町民の皆様誰もが望んでいます。学校は『コミュニティの拠点』として大きな役割を果たすことが期待されています。しかし、過去の歴史や記憶もまた、新しい歴史や伝統を支える大切な『礎』であったことを忘れてはいけません。なぜならば富岡町の子どもたちの学びを繋いできたのは三春校だからです。そして、この三春校が富岡町の人々にとって心の拠り所だったからです。

三春校の子どもたちは、これまでの先輩や先生方、三春校を支えてきた様々な方々の思いをしっかり受けとめ、使命感をもってこのDVD 制作に臨んでいます。

「これまで2年間の先輩方で伝えきれなかったことを伝えたい。」

「卒業生や先生、施設の方ばかりでなく、自分たちの日常も伝えたい。」

「三春校が閉校になることを映像作品として残したい。」

これが、3年目となる「アーカイブプロジェクト活動」への5年生2名の思いです。

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策として様々な活動が制限される中、インタビューする人を精選したり、対話や撮影の方法を工夫したりして活動を進めてきました。今回インタビューにお応えいただいた卒業生、スクールバスの運転手さんや添乗員さん、あるいはご家族の皆さんには、本教育活動にご理解ご協力をいただいたことに心から感謝申し上げます。

令和3年度末にこの三春校は学校としての役割を終え、思い出の校舎を曙ブレーキ様にお返しすることになります。冬佑真くん・みなみさんが三春校最後の卒業生になります。2名の取り組みが、三春校の10年間で富岡町立小学校の過去と未来を繋ぐ架け橋であったことを証明する大切なレガシーになることを願って止みません。

